

A1級最低出走回数は70走に戻すべきだ

石野貴之が2月の住之江・一般戦で復帰した。昨年10月の戸田SG「ボートレースダービー」を途中帰郷。長年苦しんでいた左膝の手術に踏み切った。本来なら、じっくりと治療したいところだが、A1級をキープするためには最低出走回数の「90」という数字をクリアする必要がある。石野は復帰2節目の尼崎を走った後、中0日で住之江に参戦。病み上がりの膝への負担は想像に難くない。しかし、A2級に落ちればSG復帰が遠のく。現在42歳。最高峰で勝負できる時間はそう多くは残っていない。選手生命が終わってしまうリスクを取ってでも、勝負できる時間を増やすことを優先したのだろう。

回数を消化できないのであれば、自己責任と納得することもできる。ただ、石野の左膝は勤続疲労とも言えるボートレーサーの職業病。サラリーマンなら労災が下りてもおかしくない事例だ。近年、膝の手術に踏み切る選手が増えた。A1級最低出走回数が90走になったことも決して無関係ではないだろう。

そう考えれば、公傷のようなケガや病気で手術、入院をする場合、休んでいる期間もみなし出走回数として90走に織り込むことはできないだろうか。A1級の場合、基本的に月3節はあつせんされる。すべてGIとして優出した場合の出走回数は「7」もしくは「8」。休んでいる間も「8×3=24」で1か月につき24走をみなし出走回数として認める。そうすれば、無理をすることなく90走をクリアすることができよう。競走得点は実際に走った回数で割り、それでA1級ボーダーに届かないのであれば、本人も納得できるのではないか。

グランプリの優勝賞金は2億円にするべきだ

2023年度からSG・GIの準優勝戦、優勝戦のスタート事故の罰則が強化されたが、ついにグランプリのトライアルでフライングが発生してしまった。Fを切った菊地孝平は今年のSGを走るこゝろができない。以前の規定であれば、SG4節の取り消しだった。SGの優勝戦のスタート事故の場合、以前は1年間のSG出場停止だったが、現在は2年間の出場停止となった。単純に考えて罰則は2倍になった。

それに比べて賞金の増加は微々たるものだ。グランプリの優勝賞金は1億円から1億1000万円になっただけ。グラントチャンピオン、オーシャンカップ、チャレンジカップは25年度から100万円アップの3700万円になるが、売り上げが8000億円台にまで落ち込んだ2010年度の4000万円にも届いていない。現在、業界の売り上げは約3倍になっているにも関わらずだ。

競馬のジャパンカップや有馬記念の優勝賞金は5億円。競輪のグランプリも副賞を含めれば1億4000万円だ。昨年の賞金王である古性優作は約3億8000万円も稼いだ。それなのに競輪より倍の売り上げがあるボートレース界からは、いまだ3億円レーサーが誕生していない。単純に売り上げの伸び率だけを考えるならば、ボートのグランプリの優勝賞金は3億円にするべきだし、それ以外のSGの賞金は1億2000万円にするべきだろう（グランプリシリーズ戦はのぞく）。

スタート事故の罰則が2倍になっていることを考えれば、グランプリの優勝賞金は6億円でもいいぐらいだ。それはさすがに無理？では、罰則2倍の法則から賞金2倍でどうでしょう。これなら分かりやすい。グランプリは2億円。そのほかのSGは8000万円。6億円に比べたら安いもんでしよう。SGの優勝戦の賞金が倍になれば、ボートレーサーを目指す人の数も2倍に、いやそれ以上になるはず。ぜひ一考してほしい。

艇言

報知新聞 藤原邦充

藤原邦充（ふじわら くにみつ）
1974年生まれ 50歳

香川県観音寺市生まれ。近畿大学を卒業。就職浪人の末、98年に報知新聞入社。芸能社会、中央競馬、ボートレース（1年だけ）、一般スポーツ担当を経て05年から2度目のボートレース担当に。競輪担当になって観音寺競輪取材することが夢だったが、無念の廃止に。